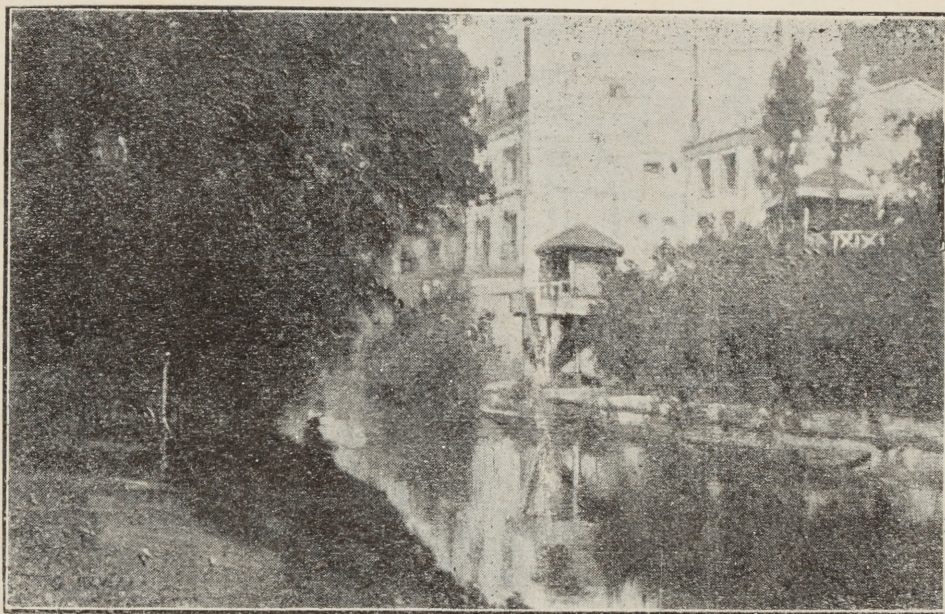


身邊時事

大下藤次郎

美術展覽會場建設に盡力せられた代議士を、精養軒に招待した席上、福井三郎氏の言ふのには『吾輩の祖父は書畫を澤山買込んで置いた、父の代になつて、これを賣つても一萬や二萬にはなると常に言ふてゐたが、いよくホントに賣らねばならぬ事になつて、京都から鑑定家を頼んで見て貰つたら、全部偽物で、一萬はおろか鑑定人の旅費も六つかしいといふ結果になつたので、父は、それを不殘村の寺へ寄附して仕舞つた。さて、寺では、毎年蟲干しに陳列して村人に見せる、そのお蔭で、應舉だ、華山だ、雪舟だ、元信だと、とに角昔からの名人の名前位ひは小さな子供迄も知つてゐる。それが、道一筋を界して、隣村となると、村長さへも碌に書畫のことを知らない、寺に美術品のあるといふことは、教育の上にもよいことだ、タトへ贋物でも其功は大したものだ』と。

趣味の普及は、書物や言語よりも、まのあたり美術品を見せ、



小河の水車場 河合新藏筆

それに親しますに限る。この意味に於て、時々各地に、展覽會の開かるゝは結構なことだと思ふ。

如何なる勞働でも厭はぬ、繪の勉強を爲度から先生のお宅に置いて頂きたい——こんな手紙は不相變月に二三通は來る。去年も『國府津たより』に言つて置たが、今日の西洋畫家で、書生を養つて勉強させてやる程の餘裕のある人は殆ど無い。私にしても若しそのやうな金があつたら、一人の爲めてなく、(眞の天才なら知らぬこと)研究所なり『みづゑ』になり注ぎ込んで、多くの人のために使ふ。斯かる希望を述べて、頼んで來る人それ自身には、必ず幾多同情すべき事情があるに相違ない、その點は諒としても、一體、今の世の中に人の家に寄食して勉強しやうなどといふ虫のよい考を持つてゐるのは間違だ。私に言はせると、其人の將來のためにも甚だよくない。他人の家に厄介になるといふことは、自然詰らぬ事になり、多少主人一家の御機嫌も取らなければ

ならぬ、種々な點から、品性が卑劣になつて、社會へ出てから後も、いつ迄もついて廻る、碌なものにはなれない。苦學はよい、苦學するなら、宜しく獨立獨行、他人の御世話にならず、他人に迷惑をかけず、自分で職業を見出して、充分やり遂げる決心で出京するがよい、一身を賭してかゝれば、ドンナ山奥の人にも、都會にはそれ相應の職業がある、それ文けの勇氣があり覺悟があつて、まづ衣食丈け自分でやつてゆける人なれば、修業の手段方法については、私は出來るだけ助けも爲やう、力にもならう、最初から衣食の世話迄は、私などには到底出來ない。

東京府主催美術及美術工藝展覽會を上野に見た、一番振つてゐるのが日本畫、次は寫眞で、工藝品も見そぼらしいが、西洋畫と彫刻は、ほんの申譯だけに薄暗い部屋に列んでゐる。水彩畫の出品は十餘點もあらう、格別評するほどの物もない。文部省の展覽會へ玉葱を出品し、白馬會に卵子を出品して、忠實なる靜物畫家として知られた柴田節藏氏は、こゝにも二點の靜物畫が出てゐる、進歩か退歩か、私には前に見た時ほどに感興が起らなかつた。竹内久子嬢の鴨はよい、樂器は一段劣るやうだ。洋畫は何故に振はなかつたか、それは時期の悪いのと、府の當局の失策とが原因であらう。五月には白馬會が開かれる、殆ど時を同ふして、同一の建物内に太平洋畫會の展覽會がある、此二つの會は、現に吾國に於ける兩大關で、技術の上では飽迄競

争せればならぬ、會員は銘々自分の會へ立派なものを出す義務がある、それで、會の有力者は相警めて一枚も出品しなかつた併し、若しも府の當局が、早くより準備し、作家とも相談して此計畫をやつたのなら、少しは繪も集まつたらうが、陳列する處さへ出來れば、繪は何時でも集まるものと考へてゐたのが大間違で、佳い繪といふものは、右から左と左様に手易く出来るものではない。

『まア島渡近くへよつて、能く見給へ！ 彼の畫師はやツぱり巧い處があるね、此の肖像畫の能く似てゐることといふものは、宛で口でも利きそうぢやアないか。』

『桑原々々！ 口を利かれては耐らない。』

『何故？』

『何故かつて、此のお爺さんにはまだ借金が残つて居たもの。』

○
甲『僕の手腕も凄じいものさ、この間戯れに往來の敷石に、五十錢銀貨を書いて置たら、通りかゝつた乞食がそれを取らうとして、生爪を剥がして了つたなどは我ながら驚いた技倆さ。』

乙『そんな事で驚くやうでは君もまだ手腕が生たよ、僕の如きは石垣の隅に豚の肉を畫いて置たら、餓た犬が其間違を見つけ出す迄に、石の半分を喰つて了つた。』(文藝俱樂部滑稽揃)